

『すみよし物かたり』



函架番号 I-53。写本（奈良絵本）3巻3冊。縦15.7cm×横22.4cm。袋綴。上巻32丁、中巻27丁、下巻26丁。1面12行。各巻に5図ずつ濃彩画がある。厚めの薄墨紙。草紋海松色表紙。外題（中央）に朱色の書き題簽「すみよし物かたり上（中、下）」内題なし。歳書印なし。第1巻末に貼紙がある。

『住吉物語』は元来、平安時代の物語であるが、現在残されているものは鎌倉時代以降の改作本（一般に上下巻）である。本学所蔵のものは、それに彩色画を施した奈良絵本。奈良絵本の『住吉物語』は、広島大学所蔵本（新日本古典文学大系所収）や個人所蔵本（石川透著『入門 奈良絵本・絵巻』思文閣出版）、国文学研究資料館所蔵本など多くの現存が知られている。本学所蔵本は横長本であることがその形制的特徴であり、江戸時代中期頃の制作と考えられる。



奈良絵本の研究は近年特に進んでいるが、これらは受容者の求めにより工房等で制作されたものと見られ、文字部分の書写者や絵画部分の画人についての記述はないことがほとんどである。本学所蔵本の本文系統（『住吉物語』の本文は大きく揺れている）や絵の特徴など考察すべき点は多いが、これらの享受者が主に大名や富裕な町人であったことなどを踏まえると、その制作過程や流通のあり方にこそ、この本の特徴を知る手がかりがあるに違いない。

『住吉物語』は『落窪物語』と同様に典型的な継子いじめ譚（女主人公が継母にいじめられ、後に貴公子に救われる）であり、その意味ではポピュラーな内容の物語と言える。一方、写真にもあるような音楽描写や、舞台の一つである住吉という地の描写については、さらに考察されてしかるべきであろう。